

ホームビジットで学習者が体験する談話の展開

——インタビューを目的とする場合——

鈴木伸子*

Discourse Features of Japanese Native Speakers and JSL Learners in an Interview-Oriented Home-Visit Program

SUZUKI Nobuko

abstract

The home-visit (HV) program, a learning activity for JSL learners visiting Japanese native speakers', triggers communications where native speakers generally play a role in the host and take initiatives for conversations with learners. In order to encourage JSL learners to take initiatives for discourse management, an interview oriented HV program was conducted. It is unknown what kind of language activity JSL learners experience through the HV program. Thus, discourse features in conversations during the HV program were analyzed; its aim is to build fundamental resources for learning activities in conversation education. The results showed the comprehensive discourse features in terms of initiatives. Initiatives in discourse between native speakers and JSL learners shifted like 'native speakers (chat) → learners (interview) → native speakers (chat)', and then learners took initiatives by stating for going away last of all. It is highly demanding that learners make utterances to take initiatives for giving an interview or leaving native speakers', considering about various factors such as relationship between conversation participants and contexts in an appropriate manner. Authentic conversations change dramatically depending upon relationship and contexts. Fostering flexible communicative skills through conversation education will be possible by exposing learners to authentic situations.

Keywords : The home-visit program, Authenticity, Interview, Conversation education, Communication

1. はじめに

中上級の日本語学習において、しばしば日本語母語話者(以下NS)へのインタビューが行なわれることがある。そこでは、特定のテーマ調査のためにNSに接して日本語を話す必要があり、ロールプレイとは異なるオーセンティックな日本語使用を促すと活動とされる。実際の接触場面を活用した学習活動のひとつと言えよう(教科書: 山下・小川1994、実践報告: 永守1999、永尾2002等)。

その際、インタビューが「どのような文脈において」実施されるか、という問題はあまり重要視されていないが、会話教育という観点では議論が必要ではないかと筆者は考える。例えば、駅前などの街頭で、不特定多数の見知

キーワード: ホームビジット、真正性、インタビュー、会話教育、コミュニケーション

*平成14年度生 国際日本学専攻

らぬNSに対して矢継ぎ早にインタビューをする場合と、特定の個人の家庭を訪問しそこで時間をかけて人間関係構築にも一定の配慮をしながらインタビューをするのでは、同じインタビューといっても、その談話の展開や発話はかなり違った様相を示すことが予想されるだろう。

NSの自宅を訪問してインタビューを行なう場合は、NSがホストとして学習者を迎えることとなる。そのため、学習者はホスト/ゲストの関係を踏まえてインタビューを遂行することになり、ゲストでありながら、インタビューにおいてはインタビュアーとして会話管理を行なう役割も果たさねばならない。その点で、教室内で実施されるビジターセッションや、教室を出て街頭でインタビューを行なう場合に較べても、NS宅においてインタビューを行なう学習者は、より複雑な談話を体験することが予測される。そこで本研究では、インタビューを目的にNSの自宅を訪れるホームビジット（以下HV）という文脈で、学習者が体験する言語活動の実態を、その談話管理を手がかりに探索的に分析することにした。

2. 先行研究

2.1 コミュニケーションとしてのインタビュー

インタビューを論じた社会学を中心とする研究者たちによると、インタビューで語られる意味とは「インタビュアーと回答者の出会いにおいて、両者が積極的に関わり、コミュニケーションを行なうことを通して組み立てられる」（ホルスタイン&グブリアム 2004：21）という相互行為的な行為であり、「インタビュアーと対象者（語り手）との会話」（桜井 2002：105）とさえ表現される。確かに、話者の役割が固定的であることを除けば、質問を適切な表現で言語化すること、相手の発話を解釈し理解が困難な場合には再び調整を試みることに、タイミングを見計らって新しい話題（質問）を切り出すこと等、インタビューにも会話全般に共通するコミュニケーションスキルが必要となることが分かる。

では、学習者にとって雑談とインタビューの違いはなんだろうか。インタビューを日本語学習に取り入れた永守（2001）と永尾（2002）によると、自分の専門分野をテーマにした学習者は、強い動機や関心を持って活動に取り組むという。確かに、入念な事前準備を自発的に行なうことができれば、そのテーマに関する限りはさまざまな質問や話題が提供できよう。しかも、インタビューではインタビュアーが会話の主導権を握る役割を担うため、学習者自身が納得いくまで同一テーマについて会話を継続することができる。この点で、学習者が主導権を取りにくく、話題も自在に変化する雑談とは異なる。従って、インタビューという訪問目的が存在することで、HVは異文化体験という枠に留めず、日本語の学習活動としても大いに活用できると思われる。

2.2 家庭という場とコミュニケーション

接触場面を活用した教育実践のうち、教室外という文脈で現実的なコミュニケーションを体験するためのものとしては、ホームステイ（以下HS）、HV、各種体験学習等がある。HSは時間的にも長く、言語面の学習というよりは生活体験という色彩が強い上に、寝食を共にする受け入れ側NSの負担が大きい。言語的なトレーニングに特化して、しかも繰り返し行なう場合には、HVと体験学習のほうが適している。

体験学習にはさまざまなタイプあり、茶道体験や工場見学とともにHVを組み込んだ例（松下・梨本 2006）や、ビジネス日本語学習の延長として会社訪問を組み込んだ例（佐野 2000）、固定した会話パートナーとの継続的な会話を実施した例等がある。ただ、個人宅で実施されるHVや企業内で行なわれる会社訪問では、会話の録音・録画がしにくいという事情があり、多くの学習者から学びや気付きがあったという感想は聞かれるものの、その分析は進んでいない。従って、会話のトレーニングとして実際に何をどこまで体験しているのか不明である。単独でHVを行なった実践例でも、その報告はアンケートによる分析が中心で（溝口 1995、舛見蘇 1997、鈴木 2004）、学習者が実際に一般家庭でどのような言語活動に従事しているのか詳細は明らかになっていない。

但し、先行研究からはいくつかの興味深い事実がわかる。溝口 1995 では、学習者が訪れた家庭でコタツや仏壇を見、生活騒音を聞き、畳に正座して「五感」によってNS宅の訪問を“体感”したと報告されている。このように、多くの情報が五感に届く文脈を構成するのが一般家庭であり、厚い文脈に埋め込まれて会話が交わされることがわかる。電話やNSの中座によって会話が中断されることもあり得るだろうし、茶菓を提供されること

もあるだろう。談話は、V S以上に複雑かつ個別性の高い文脈からの影響を受け、不測の事態が発生しやすくなるのではないかと思われる。

さらに、HVはNS=ホスト、学習者=ゲストという関係から両者のコミュニケーションがスタートすることから、挨拶後の会話もNS側の会話管理で始まることが想像される。その場合、インタビューを行なう学習者は、どこかでこの役割交替を実行しなければならない。それは、いつ、どのようにして交替するのだろうか。

また、学習者がインタビュー目的でHVを行なう場合、複雑かつ多様な要素が存在する文脈で会話の主導権を握ることが一種の課題になると予想される。そのとき、会話参加者たちはいかなる談話を形成するのだろうか。

3. リサーチクエスチョン

インタビューを目的とするHVで、学習者が直面するコミュニケーション活動の実際を明らかにする。それによって、HVが学習活動として学習者に何を提供できるか把握するためである。

具体的には、(1)インタビューを目的とするHVで、談話展開に共通する特徴はあるか、(2)その特徴はHVという場面設定のどのような要素と関係するのか、を明らかにする。

4. 本研究のデータと分析方法

4.1 データの概要

初対面の学習者とNS一家によるHV会話、計6本分¹を分析対象とする。学習者はプロジェクトワークを行なう『日本事情』の履修者で、その調査の一環としてインタビューを行なうHVに参加した(詳細は鈴木2004参照)。会話参加者の組み合わせは図表2を参照されたい。参加した12名のうち、9名の日本語レベルを筑波大学留学生センター開発のS P O T (Simple Performance Oriented Test)²のAタイプ(65点満点)で測定した結果、平均61.3点であった(最低48点/最高65点)。概ね中上級の学習者グループと考えられる。

図表1・会話参加者の組み合わせ(全て仮名)

山田宅	重近宅	重近宅	吉武宅	秋澤宅	飯田宅
夫妻:60代	夫妻:40代	夫妻:40代+娘	夫妻:50代	夫妻:40代+次・三男	夫妻:40代+娘
ケリー、真珠 (豪・韓)	蓮晶、辛玉 (韓国)	ジョー、静螢 (豪・台)	サラ、ケイト (米・星)	雅慧、白琳 (台・中)	エミリー 静螢、麗盈 (香・台)

※豪=オーストラリア、韓=韓国、台=台湾、星=シンガポール、中=中国、香=香港

4.2 分析方法

4.2.1 分析単位への分節と談話全体の単純化

HV談話に共通点を見出すため、会話内容とその談話が展開するプロセスに注目する。まずは、全データを話段ごとに分節する。話段とは「談話の内部の集合体(もしくは1発話)が内容上のまとまりを持ったもので、談話を構成する会話のまとまり」(ザトラウスキー1991)を指す。しかし、話段という分析単位に分節しても、細かいトピックを順に追うだけでは、会話内容がバラバラのデータに共通点を見出すのは難しい。

そこで、まず話段という基本の分析単位をカテゴリーに分類し(図表2の下位カテゴリー)、その後そのカテゴリーが複数集まって更に大きな塊となっている部分を上位のカテゴリーへ収束する(同表2の上位カテゴリー)。

図表2の分析例を使ってこの手順を説明すると、次のようになる。ここではプロフィールに関する話題が並ぶ第4話段までと、それ以降では大きく流れが変わっている。従って、前者の話段群を「プロフィール」というひ

とつの上位カテゴリーとしてまとめ、後者を「母国事情」としてまとめた。同様の手順を全データに対して行なう。

図表 2・話段の下位カテゴリー分類と上位カテゴリー化の分析例

話段 No	開始 発話	終了 発話	トピック	下位カテゴリー	上位カテゴリー
1	1	2	録音許可	(場面話題)	プロフィール
2	2	9	J、日本はいつから？	プロフィール	
3	10	18	豪州は何年？	プロフィール	
4	18	23	S、日本は初めて？	プロフィール	
5	24	39	出身地台中と地震	母国事情	母国事情
6	40	41	お茶をどうぞ	(場面話題)	
7	42	54	シドニーの気候	母国事情	
8	55	56	再び、お茶をどうぞ	(場面状況)	
9	57	70	豪州の地図は南北逆か	母国事情	

図表 3・話段上位カテゴリー一覧

カテゴリー	内容
プロフィール	会話参加者のプロフィールや好み、性格に関わる話題。所属・出身・家族などの自己紹介に相当する情報以外の場合は、カテゴリーに（趣味）や（住まい）という具合でカッコの中に詳細を記す。その場に不在の家族のプロフィールの場合は、同様にカッコに詳細を記す。
母国事情	学習者の出身地に関する会話。カッコの中に詳細を記す。
日本事情	日本に関する会話。カッコの中に詳細を記す。
日母比較	日本と学習者の母国を比較する会話。母国事情や日本事情とは異なり、両者のうちどちらかがメインではなく、両者が等しく語られ、比較がその中心となる。
場面状況	お茶・写真撮影・デザート提供等、現場の状況から挿入され、それまでの談話とは無関係の会話部分。同時に、誰かの視線・身体テーブル外への移動を伴う。尚、図表 4 上では「場面状況」というカテゴリー名は付さずに、「お茶」「南京玉すだれ」などの具体的な話題名を表記し、網かけによって示す。
インタビュー	インタビューの質疑応答が展開される会話箇所。
切り出し	インタビューの質問もしくは辞去を切り出す箇所。

5. 分析

5.1 談話全体の流れとインタビュー

まず、次頁の会話データのおおまかな談話展開を横断的に比較した図表 4 を参照されたい。これは、前述した手順で全 6 データの話段を下位カテゴリーに分類し、さらにそれらを上位カテゴリーへと分類したもので、おおまかな話題の推移がわかる。

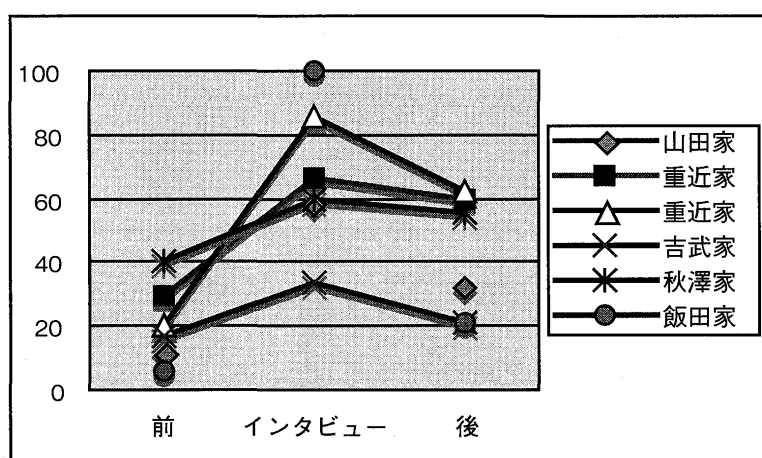
今回の H V はインタビュー目的の訪問ではあったが、図表 4 を見ると明らかに訪問の開始とともにインタビューが始まるわけでもなく、インタビュー終了と共に H V が終了しているわけでもない。到着後、しばらくあいさつや自己紹介、茶菓の提供などに続いてインタビューが始まり、その後も再びプロフィールや母国事情などの雑談が交わされている。

全データに共通する構造を示すと、「インタビュー前の会話→インタビュー→インタビュー後の会話（→辞去）」という順で会話が展開しており、インタビュー目的の H V であっても、自由な会話がその前後に必ず登場することがわかった。

- 5 J あー、去年10月から。
 6 夫 10月から。ああ、じゃあもう…。初めて？←
 7 J ん、日本初めてでした。
 8 夫 あーそうですか。
 9 J はい
 10 夫 オーストラリアは、長いんですか、何年ぐらい？←

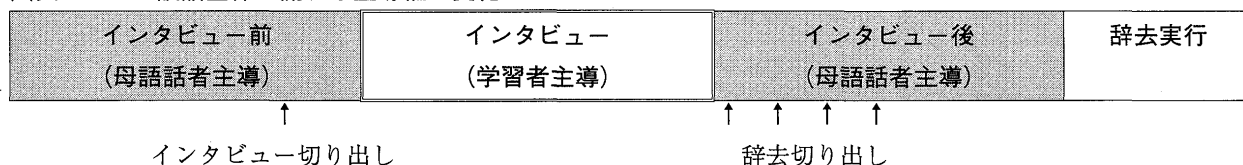
この会話例1では、先行研究から予想した通り、HVにおける会話管理はNS側から始まっていることがわかる。しかし、インタビューではインタビュアーである学習者が質問と進行を担当し、会話管理を行なう側に立つことになる。つまり、インタビューの開始と共に学習者側へと会話の主導権は移動することが想像される。そこで、全てのデータで各話段の発話開始者のうち、学習者の占める割合をインタビュー前・中・後の三部分ごとに算出してグラフ化した(図表5)。

図表5・学習者による開始発話比率の推移



すると、予想通り全てのHVデータで、インタビュー前はNS側主導の会話となるが、インタビュー開始後は学習者に主導権が移っていた。インタビュー終了後は、冒頭ほど強くはないが、再び母語話者主導の会話となる。こうした談話の展開と主導権の移り変わりを示したのが図表6である。

図表6・HV談話全体の流れと主導権の変化



ここから分かることは、学習者がインタビューや辞去を、会話の主導権がNS側にある中で切り出していることと、その切り出しが主導権の移行(=インタビュー)や会話の終了(=辞去)という発話参加者の立場の交代を伴う大きな談話の転換を実現することである。

しかし、その切り出しが転換に結びつくがどうかは学習者の都合だけで決まるものではなく、NS側の同意が得られて初めて実現されるものである。次節はこの点を詳しく分析する。

5.3 インタビュー切り出し

まず、図表4に示した6データのうち、5つは学習者のインタビュー切り出しに応じてすぐにインタビューが始まる。しかし、切り出しが失敗に終わり、数分後に改めてNSによる質問の確認がなされてインタビューが始まった例が1つだけある。その吉武家の会話を以下に示す。

会話例2・吉武家冒頭✱S=サラ、K=ケイト

- 17 夫:(正座をめぐる会話) だけどあの一、どうするの? あの一、ピクニ、ピクニックに行つて芝生のところではどうやって座ってるの? こうやって? いいよ、だからこれで。こういう座り方でいいよ。どう([S]あー)

どうでもいいんだ、ね。

- 18 **K**: えー、私ーたちは、んん、プロジェクトワークの、日本の女性のことで、えっと調べているんですけど、えっと、その中で、なんだっけ、あの一なんか質問とかーあるんですけども、そのテーマには3つがありまして《中略》ということ、を、ちょっと、あー調べて、はい。(【夫】ははは、面白い) はい。今日のお茶で、もうちょっと、吉武さんと奥さんのご意見を聞かせて頂きます。
- 19 **夫**: オーケーオーケー (笑いながら) わかった。(【K】すみません) 今、あの一、ちょっと、家内が、お茶の、支度してるから。あの一、こちらへ来ますから。僕もちょっと写真写すから。こういうね、畳の部屋は、あんまり、す、座らないでしょ？
- 20 S: ぜんぜん
- 21 夫: ぜんぜん、座らない？
- 22 K: でも一応ベッドは、畳なんですけど。
- 23 夫: ああー、畳ね、のベッドね。それがー今、寮なの？

発話17まで正座をめぐる話題が続いたところで、ケイトはインタビューへの移行を試みた(発話18)。彼女は「吉武さんと奥さんのご意見を」聞きたいと言ったが、目前に居るのは吉武夫だけである。妻はお茶の用意をしており、まだ席についていない。この時、吉武夫はケイトの依頼を保留し(発話19)、主導権を握ったまま新しい話題を続けた(発話23)。実際にインタビューが始まったのは、お茶とケーキの用意をしていた吉武妻が登場し、世間話をしながらケーキを食べ始めた後のことである。妻が不在の間のインタビュー依頼が吉武夫にとっては適切ではなかったことがわかる。彼は、次のように先ほど保留にした学習者の切り出しを次のように確認し、インタビューは始まった。

吉武夫「あ、あの一、さ、砂糖いる？いい、いらない？んん。あ！ここにあるんだ(笑い)。もしあれだったら。(短い間) えーとね、1番目(の質問)がね、えーっと、け、日本、女性のなんだっけ？日本…」

次の会話例では、雅慧(=M)が「みんな」の意見を聞きたいとインタビューの依頼を切り出し、秋澤夫も同意したが、秋澤妻はお茶のために席を立てていた。切り出したものの彼女が中座した状態でのアンケート開始の不都合に気付いた雅慧が「今の状態で始めるのか？」と戸惑ったのを見て、秋澤夫が気を利かして妻を促した場面である。

会話例3・秋澤家インタビュー切り出し場面(妻は中座中)

- 527 夫 中国で大きいからね
- 528 H うん大きいです
- 530 **M** あとは、なんか、研究テーマについてのことを、訊きたいんですけどみんなに←
- 531 **夫** いいですよ
- 532 H (質問を)訊いて下さい【※Mに向かって】
- 533 M 今？これから？
- 534 **夫** ママ、研究テーマだっけー【※台所でお茶の支度中の妻に】
- 535 妻 [台所から] 紅茶にね、お砂糖は入れますかー？
- 536 H 私、結構です
- 537 M これーでいいです、はい
- 538 妻 あなた紅茶のむ？
- 539 夫 うん
- 540 妻 [席に戻る] テーマが、何かもう決まったのがあるんですか？

会話例2同様、ここでも学習者の切り出し直後にインタビューが始まったわけではない。会話例の吉武夫とは異なり、秋澤夫はすぐインタビューに応じようとしたが、学習者側の意図は「みんなに」訊くことだったため、妻が中座するタイミングでの切り出しは矛盾していると言えよう。そこで、その状況を見誤って戸惑う雅慧のために、夫が妻に早く戻るよう促す声をかけたのである(第534発話)

家庭とは、実験室や教室に較べて会話参加者(特にホスト側にあたるNS)の中座が容易に可能な場所である。その分、インタビューの移行のように、主導権の移動を伴う大きな話題転換は、その場の状況を十分に把握しな

ければスムーズに実現しない。会話の内容はもちろんのこと、文脈全体をよく見極めて判断する力が問われるのではないだろうか。

5.1 辞去切り出し

インタビューの切り出し以上に判断の難しいのが辞去の切り出しである。図表4のうち、重近家・秋澤家・飯田家では辞去切り出しの失敗が見られ、飯田家に到っては3回目ようやく辞去が実現した。結果的に一度の切り出しで済んだ場合でも、長らく辞去を言い出すタイミングを計っていた可能性もあり、事実、訪問後のフォローアップインタビューでは辞去切り出しの難しさを挙げる声があった。その場の状況が会話終了に向かっている必要がある。例えば、相手方NSの思惑が終了に向けて一致しないと、辞去も切り出しにくい。例えば、図表7に示す飯田家の辞去直前の展開を見てみよう。

図表7・飯田家インタビュー後の会話における談話展開（辞去直前）

58	1486	1515	父	日本でのスキー体験	67	1686	1699	娘	年齢は？
59	1516	1518	父	今後のこと	68	1700	1702	父	今後も頑張って下さい
60	1518	1532	父	今後日本でいきたい場所	69	1703	1738	娘	これから行きたい場所
61	1534	1542	父	ビデオも終わった	70	1739	1764	娘	中華街
62	1543	1552	娘	来年は青森暮らし	71	1765	1776	S	中台のちがいがい
63	1553	1628	娘	母国の動物事情比較	72	1777	1786	E	香港の飲茶
64	1628	1667	父	東京のからず	73	1787	1833	父	台湾、香港の基本情報
65	1669	1684	娘	縁起悪いジंकス	74	1835	1848	E	御邪魔しました【辞去3】
66	1685		父	御引き止めしても…					

これは、各話段を誰が開始し、それぞれどのような内容だったかを示すものだが、父親はそろそろ切り上げたい意図を発話に反影させ（第66・68話段）、娘のほうは次々と新しい話題を持ち込んでいる（第62・63・65・67・69・70話段）。こうしてひとしきり父娘間で思惑の異なる発話が続いた後、ようやく学習者側が話題を持ち込めるようになり（第71話段以降）、切り出しは成功した。次は、学習者側とNS側の終了に向けた思惑が噛み合わず、辞去切り出しが失敗した会話例である。

会話例4・秋澤家（ビデオが終了して白琳＝Hが突如辞去を切り出す）

- 673 M [国際学生活動の話] T大学でインターシップセミナーみたいな活動があるねー [ビデオ終了のブザーで中断される]
- 674 夫 おわったおわった！よし！
- 675 妻 次があるの？次があるの？
- 676 次 ないよ。
- 677 H そろそろー<長い間お邪魔しまして、失礼します。> {<} ←
- 678 夫 <いやいやまだまだまだ あれ [=ビデオ撮影] 終わっただけだから> {>} 大丈夫、まだ←
- 679 三 これ [=ビデオのこと] どうしたらいいの？
- 680 夫 それもう止めといていいって
- 681 妻 これどうぞ。[学習者に菓子をすすめる] 今ねー、わたしね、サンドイッチも用意してたのね、テーマの話が終わったらね、お出ししようと思っていたの。ゆっくりしてください。/少し間/それでそのT大学とK大学のセッション、集まりっていうのはTW大学でしたの？

これは、インタビュー終了後の会話で、ビデオ撮影の終了ブザーとともに白琳があわてて辞去を切り出した場面である。その場の状況に対応したというより、一時間を経過したことを示すビデオのブザーに対応しての切り出しであった。これに対して、秋澤家側は「ビデオがおわっただけ」（秋澤夫）「サンドイッチがあるから」（秋澤妻）と引き止めている。秋澤夫の「まだまだまだ」という表現には、「話し足りない」という意志が見て取れるのではないだろうか。

ここからわかることは、辞去の成否は単純に時間が何分経過したかによって決められる問題ではなく、会話参加者全員の「十分話した」という満足や達成感で決まることである。HVには、通常の授業のように明確な制限

時間があるわけではないため、会話をいつまで続けるかは、外部条件というよりも純粹に当事者同士の思惑によって決まる。そのため、会話例3や4のような事態も頻繁に発生し、相手の意図を発話や動作、場面などを手がかりに辞去を判断する必要性は高まる。もちろん、スムーズな辞去切り出しは学習者ならずとも極めて難しいものだが、あらゆるコミュニケーションが授業のように一定の時間で終わるとは限らないことを考えると、HVのようなコミュニケーション体験は学校ではできない貴重な学びに繋がるのではないかと考える。

5.2 インタビュー前後の会話に共通する特徴

インタビュー前後に展開される会話の特徴として、文脈に影響された話題がしばしば登場することが挙げられる(図表4の網かけ部分)。具体的な発話内容としては、お茶・デザート・地図・室内の写真など多種多様で、飯田家のように隠し芸(南京玉すだれ)が披露されるケースもあったが、いずれも具体的な事物がからんでいる点では共通している。具体的な事物が絡むという点では抽象度は低くなり、発話内容の理解は容易と思われるが、談話の流れとは無関係に入り込んでくるという特徴がある。次の会話例でも、未婚男性の増加について語り合っていたところで(第380発話まで)突如NS側が室内の温度について言及している。

会話例5・山田家「クーラーを切りましょう」

- 380 妻 それで結婚しない人が多いですね。男性側にね
 381 夫 寒くない?大丈夫、みな、皆さん?←
 382 妻 寒いじゃない? [クーラーを] 消したら
 383 夫 いや、だから
 384 C [慌てて] あっ、全然寒くない←
 385 妻 ごめんなさい [※リモコンの音:チン] ちょっと消しますね。
 386 夫 どちらでもいいけど。私たちは、うちはこうね、体感温度が違うの。体感温度ってわかる?
 387 J あ←
 388 C 違うんだ←

山田夫妻それぞれの冷房に対する態度、夫妻の気配りなど、さまざまな要因が垣間見えるが、仮に要望があればこの状況の中でどう表明すべきかを瞬時に決断しなければならない。或は、写真など室内の事物を見せられて評価を言う必要に迫られる場合もあるだろう。

いずれも、その場に形成された相手との人間関係を踏まえると、どのような発話で応じるのが相応しいのかを見極める必要がある。相手が同年代の相手であればこの関係性を見極めはさほど難しくはないかもしれないが、待遇性の生じる年長者を相手に、そこでの相応しさをどう把握するかは、経験を蓄積するほかない。必ずしも教科書通りの待遇表現が好感を持たれるとは限らない。

次の会話例は、会話例6同様に場面状況から始まった会話だが、ここでも学習者は相手との関係性を構築しながらやりとりをしている。具体的には、広い和室に通されて座卓に座ろうとした学習者サラ(=S)が、吉武夫の勧めに応じて胡座で座るまでのやりとりである。一般的な和室のマナーという点では違反だが、当事者同士では容認された。この容認のプロセスが会話参加者間の心理的な距離を近づけているように見える。

会話例6・吉武家「正座ってどう座るんですか?」

- 1 夫 どうぞどうぞ膝を、僕もこう… [膝を崩してあぐらをかく]。
 2 K すいません、失礼します [正座を崩そうとする]。
 3 夫 あー、足が痛くなるよ。[正座を続けようとするSに向かって]
 4 S あ、普通はどうやって座るんですか?
 5 夫 んん?
 6 S 普通。
 7 夫 女性? うーん、女性はどうでもいいよ。あの一、普通、正座はこうやって正座する。できる?
 8 S いちお。(うん) 一瞬は。<笑いながら>
 9 夫 <笑い>一瞬ね。それで<笑いながら>、まあ、ど、どういうふうにやった……く、崩すとまあ、僕はこうやってあぐらかくけど、あぐらってわかる?

- 10 S そういう… [T氏の座り方を見る]
 11 夫 うん、こういうの（はい）うん。
 12 夫 初めて座る
 13 K ま、いいか<SK二人笑い>
 14 夫 だけどあのー、どうするの？ あのー、ピクニ、ピクニックに行つて芝生の所ではどうやって座つてるの？（あはは<笑い>）こうやって？ [あぐらのこと] いいよ、だからこれで。こういう座り方でいいよ。どうでもいいんだ、ね
 15 SK はははは<二人で笑う>

このエピソードに端的に現われているのは、マナーという世間一般の規範は必ずしも接触場面に適応されるものではないということ、更に、接触場面では会話参加者同士によって新たな規範を生成することができる、ということである。訪問先での、若い女性の胡座はマナー違反に違いないだろう。こうした社会規範にこだわるNSなら、二人の学習者にも正座を要求するかもしれない。この学習者たちも、当初は「普通、どうやって座るんですか？」と、一般的な社会規範を知りたがっている。

これに対していったんは正座を教えた吉武夫であったが、自ら足を崩すと同時に二人に対しても「(胡座で)いいよ。どうでもいいんだ」と一般的マナーからは離れてその場だけの規範を表明し、学習者側もそれに同意して胡座で座ることを選んだ。

上記の2つの会話例からもわかるように、HVで場面状況から導かれた会話には、即興的な対応力を、良好な対人関係を維持と同時に、問われることが多い。これもHVの特徴の1つと言えよう。この時、会話例6のように、相手との関係性を踏まえつつ、当事者同士だけの新たな規範を創造する場合があるが、このような規範の創造は、接触場面における会話参加者全員の会話への参加を等しく促進するのではないだろうか。

6. 分析のまとめと考察

今回は、インタビューを行なうHV談話がインタビューだけでは終わらず、<インタビュー前・インタビュー・インタビュー後>という構造で展開されることがわかった。しかも、それぞれ順にNS主導・学習者主導・NS主導で展開され、インタビューと辞書の切り出しには主導権の移行を伴う。従って、切り出しを発話するにあたっては、その会話をめぐる文脈状況が、談話の転換に適切かどうかを判断する必要がある。さらに、インタビュー前後の会話では、母語話者の誰かの体や視線が会話の場から空間的に離れることを始め、お茶・室内の写真・隠し芸など文脈に起因する発話が談話とは無関係に突如登場することがしばしばあり、しかもNSとの有効な関係性をいかに構築するか、という問題もクリアしなければならない。学習者は、そのような状況下で適切な切り出しのタイミングを判断することになる。こうした不確定要素の多さこそが家庭において実施されるHVの特徴ではないかと思われる。

従って、インタビューを行なうHVとは、話題がリアに展開されて学習という性格の強いインタビューと、不確定要素を含みつつも気楽な会話の双方が体験でき、両者の転換点では転換の適切さをタイミングよく判断して切り出す練習もできる学習活動といえるだろう。

ところで、文脈からの突発的な発話への適切な反応や、タイミングの良い切り出しとは、状況や談話に応じて決まるものであり、文型のように形の決まったものではない。それゆえ、HVを体験して日本語の力が身につくのかという疑問も生まれるかもしれない。

コミュニケーション能力の養成に必要なとして、尾崎(2006)は話題転換を例にとり、「(1)話題転換に必要な表現(「～と言えば」「～のことなんだけど」「～のこと、聞いた?」など)を覚えて言えるようになることと(2)そのような表現の中から適切なものを選んで実際の会話の中でタイミングを見計らって話題転換を行なう経験を積むこと」(同:207)が必要だと指摘した。この「実際の会話」の多くが、不測の事態が絶えず浮上する豊かな文脈で交わされていることを考えると、HVを実施する意味が更に明確となろう。

意味の生成を、個々の発話者の頭の中ではなく「社会的相互作用の場」の中に位置づけ、学習とはその場に「参加」することだと捉えた状況的学習理論によると、或るコミュニティに参加する新参者の習熟とは、知識や技能

だけを指すのではなく、その参加領域（＝特定の文脈の範囲内）で最も起こりやすいことを予見する力や即興的行為の能力の獲得も含むと言う（レイブ&ウェンガー 1991）。従って、ある母語話者宅で即興的に難易度の高い切り出しを体験することは、別の家庭を訪問したときにより円滑な切り出しとして生きてくる可能性がある。HVにおける場面設定や適切さは一律ではないが、適切さを予見する力や即興的な対応力があるとしたら、どこの家を訪問してもその力を応用することは可能だろう。この予見能力と即興力はいずれも言語能力の範疇には含まれていないものだが、現実社会で日本語を使った活動をする際に欠かせない力となるのではないだろうか。

7. 今後の課題

本研究により、インタビューを目的とするHVにはどのような談話的枠組みがあるのか、そこで学習者はどのような言語活動を体験できるのかが明らかとなった。とは言え、限られたデータによる分析結果であり、これがHVにおける談話の特徴を網羅したとは言えない。それでも、従来はVSと同一視されることの多かったHVで、家庭という場による特性の一端を明らかにした点で本研究の意義はあると考える。

今後は、今回取り上げた談話全体の特徴に次いで、インタビュー箇所やその前後の会話箇所といった細部に注目する分析を行ないたい。また、NS側が家族ぐるみで参加することによる特徴も検討する予定である。さらに、自由会話を行なうHVや、既知関係にある参加者によるHVではそれぞれ独特の特徴が浮上する可能性がある。これらの課題に応えていくことで、家庭で実施するHVの特徴を更に明確にしていきたい。

註

- 1 実施したHVは全14回だが、そのうち、挨拶や自己紹介から辞書の切り出しまでが録音されたものが分析対象とした6本である。全てのHVを対象とできなかったのは、教員による日本人協力者への事前説明とは別に、当日、学習者自身が録音について説明をし、許可を得た上で機材を操作するというタスクを盛り込んだ為、機材の操作ミスをはじめ、音声小さくて聞き取れないなどの録音トラブルが相次いだことによる。
- 2 SPOTとは、ひらがな一字が空白の短文を、テープ録音を聞きながら穴埋め作業をしていくテスト。1990年に筑波大学留学生センターで試用され、従来型のプレースメントテストとの高い相関を示した（小林1997）。AからDまでレベルごとに4種類ある。筆者が使用したAは最も難しい中上級向け。

【参考文献】

- 尾崎明人（2006）「コミュニケーション能力の育成」 国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』 pp.196-220
- 小林典子・山元啓史・フォード丹羽順子（1996）「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『世界の日本語教育』6, pp.201-217
- ザトラウスキー, P（1991）「会話における『単位』について—『話段』の提案」『日本語学』10（10）, pp.79-96
- 佐野ひろみ（2000）「経営大学院生のための日本語集中コース実践報告—経営大学院生のための体験学習クラス」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』23 pp.70-91
- 鈴木伸子（2004）「日本事情クラスにおける家庭訪問プログラムの試み」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』7, pp.209-225 国際交流基金日本語国際センター
- 永尾昭子（2002）「インタビューを取り入れた一般社会人対象の授業」『AJALT日本語研究誌』創刊号, pp.36-47 社団法人国際日本語普及協会
- 永守彰子（1998）「インタビューを用いたプロジェクトワーク—上級学習者のための試み」『九州大学留学生センター紀要』10, pp.33-46
- ホルスタイン J. & グブリアム J. 山田富秋、兼子一、倉石一郎、矢原隆行訳（2004）『アクティブ・インタビュー—相互行為としての社会調査』 せりか書房
- 舩見蘇弘美（1997）「日本人との接触場面のためのインターアクション能力の開発—海外（オーストラリア）学習者の日本人家庭訪問を通して」『平成9年度日本語教育学会春期大会予稿集』社団法人日本語教育学会 pp.45-50
- 松下達彦、梨本順子（2006）「体験型日本語クラスの実践と評価—中上級におけるニーズと学びの検証」『2006年度日本語教育学会春期

鈴木 ホームビジットで学習者が体験する談話の展開

大会予稿集』 pp97-102 日本語教育学会

溝口博幸 (1995) 「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情—『日本人家庭訪問』の場合」『日本語教育』 87 pp114-125 日本語教育学会

山下早代子、小川早百合 (1994) 『インタビュープロジェクト—日本人の価値観発見』 くろしお出版

レイブ, J. & ウェンガー, E. 佐伯胖・福島真人訳 (1993) 『状況に埋め込まれた学習』 産業図書

(2007年1月12日受理)